

料金後納

ゆうメール

(株)育脳寺子屋MAC 本部教室 MAC真成熟  
〒616-8156 京都市右京区太秦西野町20  
電話:(075)871-0374 FAX:(075)882-3777

2018年  
2月号

Mathematics Abacus Chinese character

# MAC NEWS

お子さんが大人になった時、社会で活躍できるヒントがいっぱい！！

## 箱根駅伝4連覇の青山学院大学、 原監督の指導法に学ぶ ～選手である以前に社会人として～



早いもので、今年もひと月が過ぎました。子どもたちも年明け2週目くらいまでは頭がお正月モードでしたが、やっといつもの様子に戻ってきてほっとしています（笑）

ひと月ほど前の話題になりますが、お正月は毎年箱根駅伝を見ています。今年は青山学院大学の4連覇で幕を閉じました。本当に強い！という印象でしたね。

陸上競技はいわゆる「タイム」を競う競技です。しかし、持ちタイムの良い選手・チームが勝つとは限りません。特に駅伝となれば往路・復路合わせて10人の結果で順位がつきます。チーム全員が一丸とならなければ結果に繋がらない中、チームを4連覇に導いたのは名将、原晋（はらすすむ）監督です。

その指導法には学ぶべき部分が多くありました。常に「良い結果を出す」強いチームはどのようにして作られたのでしょうか。

## 上下関係はないが、ルールは厳しい

青山学院大学の陸上部は上級生、下級生の垣根は低く、監督・選手間の距離も近いのが特徴で、選手に聞いてもいわゆる「体育会系」の雰囲気はあまりないと言います。

しかし、その一方で選手たちが声を揃えて言うのは、寮則などのルールの細かさと厳しさ。特に門限等、時間には厳しいらしいのです。あるインタビューで原監督は、

『僕の経験した高校時代の理不尽な部活と、大学時代のサークルのような緩くて自由な部活、両方ともダメだと思いました。一方で両方の長所が両立している組織が理想の組織だと思います。』

組織というものは、ベースにはちゃんと組織としてのルールがあって、その上に自由な発想というのが乗ってくるものだと考えています。最初からすべての自由を与えてしまったら、それは単なる緩い組織となり、組織として重要な土台がしっかりできない。ですからまずはベースづくりには時間をかけました。特に陸上はタイムで管理される世界ですから、集合時間などは1秒単位までうるさいですよ。

そういう組織で育たないと、大学を出た後に一選手ではなく、一社会人として彼らが困るだろうなあという気持ちもあった。つまり、基本的なルールが守れなかったり、自分で発想できなかったりしたら、選手以前に、一社会人としてダメですから』

と語っておられました。原監督は技術的な指導だけではなく、もっと先を見据えた人間性を重視した指導をされています。その結果がこの圧倒的に強いチームを作ることとなったのです。

## コミュニケーションを重視する

選手たちの自主性を促す方法として取り入れているのが「目標管理シート」と「目標管理ミーティング」です。

「目標管理シート」は全ての選手に手書きで毎月書かせていて、A4の用紙にタイトルと毎月のチームのテーマ、それに対する個人のテーマ、その下に個々の目標とそれを達成するために何をすべきかを具体的に記入してあります。

そのシートをもとに、学生たちで6人ごとのランダムなグループを作らせ、ミーティングをするのが「目標管理ミーティング」です。このミーティングは毎回かなりシビアな議論になるらしいです。

このようにコミュニケーションを重視する理由は、選手たちの将来に対する強い思いがあるからです。

『特に箱根駅伝の常連校になると、監督がいてコーチがいてマネージャーがいて、全部がシステムティックに動いていて、選手たちはただ走るだけが仕事というような組織になっている傾向があるんです。

でもそんな環境で四年間を過ごしてしまった人間は、果たして会社に入ってからどうなのか。

だからそれを変えたいという思いもあるんです。今までの陸上部的な指導とは真逆な、コミュニケーションや言葉を大切にします。

目標管理ミーティングなどで、コミュニケーションをとることを指導ノウハウの軸にしているのにはそうした意味もある。そうしないと陸上部引退後に会社に入って、コミュニケーション能力のない奴は、出世できません』

そのような組織だと、マネージャーなどの学生スタッフにも主体的が生まれてくるようです。

『できないマネージャーは「今日の練習どうしましょう」とただ訊いてくる。できるマネージャーは「今日の練習は〇〇ですけど、ちょっと暑いので一時間ずらしましょうか？」と提案してくる。自分の中で選択肢を持たないでただ訊いてくるマネージャーに対しては、「君はどうしたいの？」と訊き返します』

この「相手から答えが出てくるのを待つ」ということが、一般社会の上司でも、我が子に対する親でも、指導者でも出来ていない人が多いと原監督は言います。

## **原監督の指導理念の根本は、MAC真成塾と全く同じ！！**

大学生相手と、幼児～中学生相手なので当然のことながらレベルは違いますが、生徒を指導する際の考え方はMACと通ずる部分が多く驚きました。

MACの小学部では小1～小6まで無学年で、一つの教室で学びます。

90分の授業の中には5～10分程度、上級生が下級生に漢字を教えたりと、学年の垣根を越え学び合っています。また、指導者が上、生徒が下という関係性ではなく、あくまで生徒の自学自習を支えるサポーターのような位置を意識しています（当然問題の解き方は指導しますし、注意が必要な時は厳しく注意することもあります）

指導する側が一方向的に、強制的にやらせれば、その瞬間はちゃんとするのですが、長期的に自主性を持って行動出来るようにはなりません。その子その子に合った、「こうすれば自ら動いてくれるだろう」という声かけを探りながら、実践しています。

親御さんにはよくご理解頂いていると思いますが、MACでは生徒たちは自分のペースで、自分の考えた順番で学びます。その結果、達成感（＝僕・私は自分でできた！という自己肯定感）を得られるので、塾なのに「楽しい」という子が多いのです。

しかし、そうは言っても楽に流れやすい小学生。「楽しい」教室を維持するためには、やはり「ルール」が必要になってきます。そのルールが無ければ原監督の仰るように緩い組織になってしまいます。MACでは、

- ・必ず「こんにちは」「さようなら」の挨拶をする。
- ・忘れ物をしたら授業を受けられない。
- ・自分の出したゴミ（消しゴムのカス等）は自分でゴミ箱に捨てる。
- ・月に一度、解き終えた育脳トライアルの感想文を提出しなければいけない。
- ・休む時は必ず連絡をしなければならない。

等々、普通の学習塾にすれば厳しいと言われるルールをいくつも作っています。中にはそれが煩わしくて退塾される方、入塾を見合わされる方がいるかもしれません。

しかしそれは子どもたちの将来の為と考えてのこと、単なる罰でしていることでは無いことをご理解頂ければと思います。

中学部になれば、各自テスト2週間前から細かい学習計画を立ててもらい、それに従って学習を進めます。そしてテストが終われば学習計画とテスト結果を見返し、次回の学習計画を立てる際の参考にする、ということを繰り返してもらいます。(これはまさに青山学院大学の「目標管理シート」と同じです)

これを繰り返すことで「自分に合った勉強法や勉強時間(量)」を自分自身で把握することができます。

原監督が『全部がシステムティックに動いていて、選手たちはただ走るだけが仕事になってはいけない』と言っていましたが、塾でも『指導者が指示して、生徒たちはただ言われたことをするだけ』では、その時のテストでは良い点を取れるかもしれませんが、その後、社会に出てから役立つ力は育まれないでしょう。

ここで大切になってくるのが、原監督も仰っていた「相手から答えが出てくるのを待つ」ということです。

本当に教育や子育ては『忍耐』の一言に尽きると感じます。パッと指示を出して取り組ませればこちらも楽なのですが、それをしても意味がありません。自分で考えさせ、自分で行動させ、失敗したらその失敗から学ばせるしか無いのです。

弱小駅伝部を箱根駅伝4連覇に導いた原監督の指導法と同じような指導法を小・中学生にしているのですから、なかなかうまくいかないことも多いでしょう。すぐには目に見える成果が無いかもしれません。

しかし大切なのは「待つ」ことでしたね。何事も結果・成果を求めすぎると子どもは潰れます。親の過度な期待で我が子を潰さないよう、まずはこの1年「じっくり待つ」訓練をしてみてください。